

朴正熙元大統領とハングル専用

高 島 淑 郎

朴正熙元大統領とハングル専用

高 島 淑 郎

目 次

- I. はじめに
- II. 朴正熙とハングル
- III. ハングル専用政策
- IV. 反“専用”運動と朴の宗旨替え
- V. 揮毫に見る“専用”の実践
- VI. おわりに

I. はじめに

韓国⁽¹⁾のハングル専用政策には、朴正熙元大統領が大きく関わっている。知識人や紙媒体のマスコミの強い反発に遭いながらも、朴はハングル専用政策を掲げ、その実現を目指して突き進んだ人物である。

関連する計画や談話を矢継ぎ早に発表し、世宗の銅像を徳寿宮に建立⁽²⁾し、そして景福宮正門の光化門扁額に「광화문」(「光化門」)⁽³⁾とハングルで横書きした。しかし、その勢いとは裏腹に結末は意外にもハングル専用の完全実施とはならなかった。

朴が没して33年になるが、現在もなお、文字政策に関してはハングル専用⁽⁴⁾派と国漢文混用⁽⁵⁾派の論争がつづいている。近年、漢字は日常生活からほぼ姿を消したが、ハングル専用派が完全勝利を収めたとは言いがたい。たとえば高麗大学は、漢字能力検定試験2級⁽⁶⁾以上、あるいは学内漢字試験の合格等を卒業条件としているし、サムスン(三星)グループ等の大企業でも漢字能力の資格証保持

者に入社試験で加算点を与えている。また学校教育でも中・高校の選択科目の中に「漢文」としてその命脈を保っている。

韓国の、このような文字環境を理解するうえで朴正熙とハングル専用政策を知ることは大事である。本稿は、朴の視点でハングル専用政策を顧みつつ、同時に朴個人がハングル専用をどのように実践したかについても論じる。なお朴の実践については、朴が残した演説文や揮毫、関係者の証言などから明らかにする。

今までハングル専用政策についての研究は数多くなされてきたし、現在もなされている。政策を支持する立場、反対する立場、あるいは広く言語政策や教育政策の面からなされた研究も多い。無論、朴個人の伝記も枚挙にいとまがないが、朴個人に焦点を当てたハングル専用、あるいは朴個人のハングル専用の実践について論じたものは管見にして知らない。

II. 朴正熙とハングル

朴元大統領(1917年～1979年)は、1961年5月16日に軍事クーデターを執行し、1979年10月26日に側近の放った銃弾に倒れるまで18年間、韓国の最高権力者の地位に居続けた人物である。

慶尚北道善山郡亀尾面上毛洞の貧しい農家に育ったが、教育熱心な母のもと、普通学校で学び、1932年4月1日には大邱師範学校へ進学、1937年3月25日に卒業、その後3年

近く(1937年4月1日～1939年11月)普通学校で教鞭を執るが、その後は一貫して軍人の道を歩んだ。1940年、満州新京軍官学校入校、1942年に日本陸軍士官学校入校、1944年に満州軍陸軍少尉任官、解放時は中尉であった⁽⁷⁾。

朴が生まれてから1945年の解放までの間、朝鮮は日本の植民統治下にあった。朴が教鞭を執っていた頃の普通学校での教育は、朝鮮語ではなく日本語でなされていた。小学校規定に、1938年4月からは「教授用語ハ日本語ヲ用ウヘシ」⁽⁸⁾とあるが、実際にはこれより前から日本語使用の徹底を求める通達が出ていた。韓国の著名な小説家・朴婉緒(2012)は、自伝小説の中で、解放直後、通っていた高等学校の2年のクラスではハングルの基礎が教えられていたと書いている。16,7歳の女子学生が、ハングルの“ㅏ(カ)”“ㅑ(キャ)”“ㅓ(コ)”“ㅕ(キョ)”を習っていたことになる⁽⁹⁾。若い朝鮮人の日常からハングルがすっかり抜け落ちていたのであろう。

後にハングル専用(以降“専用”と略す)政策を掲げる朴であるが、この朴にとって、あるいは少なくとも植民地下を生きた朝鮮人にとっては、“専用”か、国漢文混用(以降“混用”と略す)かといった文字論争とは別の次元でハングルが存在していたに違いない⁽¹⁰⁾。

なお、師範学校時代に朴が最も好んだ教科は漢文で、特に唐詩を好んだようだ⁽¹¹⁾。これも単に一つの教科として捉えるのではなく、“日本語をほとんど經由せずして学べる教科”という観点を見逃してはならない。朴は大統領になって以降、盛んに漢文で揮毫を書くようになるが、このことも師範学校時代に学んだ漢文と無関係とはいえないであろう。漢字とハングルの関係は、必ずしも対極をなすものではなく、両者の間に日本語を置けばこの両者は同じ側に立つのである。

では、朴はハングルのどのような存在と位置付けていたのであろうか。大統領に就任す

る前の1962年に著した書『韓民族の進むべき道』を見てみよう。「伝承すべき遺産」の最初にハングルを挙げている。

世宗大王(1397年～1450年)は、わが文化史上輝かしい業績を残した聖王であるばかりでなく、言文一致の原理に立脚したハングルの制定は実に民族的自覚から湧き出た賢策であり、その偉大な業績は「近世韓国の民族文化革命」といっても過言ではない⁽¹²⁾。

世宗とハングルを高く評価している。権力を掌中に収めた1961年以降の朴も、10月9日の「ハングルの日」には必ず談話文等を通してハングルは民族の誇りであり財産であると称えつづけた。

Ⅲ. ハングル専用政策

1. 1945年～1960年

ハングル専用という理念は、日本からの解放後に生まれたのではなく、その萌芽は19世紀にすでに見られた。高宗32年(1894年)の勅令に次のようなものがある。

法律命令は国文を基本とし、漢訳を付すか、国漢文を混用する(高宗勅令第76号第8条)⁽¹³⁾

勅令自体は漢文で書かれてあるが、ハングルの強く意識させる内容となっている。なおこの勅令が発せられるに至った過程には、樋口謙一郎(2006)によれば、福沢諭吉の存在が大きかったようだ⁽¹⁴⁾。

解放直後の1945年9月7日、38度線以南では米軍政が敷かれた。韓国独立の1948年9月9日まで米軍政期は続くが、この間の言語政策に1945年9月29日公布された在朝鮮米軍陸軍司令部軍政庁法令第六号⁽¹⁵⁾がある。英語、朝鮮語、日本語の3言語で公布された

もので、“専用”は謳っていないが、ここでは第四条「教訓の用語」に注目したい。

朝鮮学校に於いて教訓用語は朝鮮語とする。朝鮮語による教訓資料を活用するまでは外国語の使用も妨げない⁽¹⁶⁾。

解放後，“日本語”を葬り去り、ただちに“専用”へという思いもあっただろうが、日本語という外套は容易に脱げるほど軽いものではなかった。第一歩としてまずは日本語でなされていた学校教育を朝鮮語に置き換える手続きが必要だったわけである。

1945年12月8日、米軍政庁学務局朝鮮教育審議会第9分科（教科書担当）で漢字廃止と横書きについての討議・決議がなされる。“専用”政策へ向けて具体的なスタートが切られたのはこの時からといってよいだろう。そして大韓民国樹立後の一回目の「ハングルの日」（1948年10月9日）に公布される法律第6号へと繋がっていく。

大韓民国の公用文書はハングルで書く。但し、暫くのあいだ必要な時は漢字を併用できる⁽¹⁷⁾。

ここにある但し書き、つまり「暫くのあいだ（얼마동안）必要な時は漢字を併用できる」という曖昧な時限付き許容が、今なおつづくハングル専用派と国漢文混用派の対立の原点となっている。“専用派”は条文からの「但し書き」削除を求め、“混用派”は継続を求めている。法律は公文書に限ったことであるが、実際には出版界や日常の文字環境にも影響を与えたのであった。

1948年、米軍政が幕を下ろす。代わって韓国に初代大統領李承晩が誕生し、“専用”に関する画期的な議決がなされる。檀紀4290年（1957年）12月6日、第117回国務会議にてなされた「ハングル専用積極推進」に関する

議決である。

- （1）公文書は必ずハングルで書く。しかし、ハングルだけでは理解しにくい語にはカッコを付け、漢字を書き入れる。
- （2）各機関が発行する刊行物は必ずハングルで書く⁽¹⁸⁾。

但し書きの内容が、1948年の「漢字を併用できる」から「ハングルだけでは理解しにくい語にはカッコを付け、漢字を書き入れる」へ変化した。つまり、漢字は使ってもいいがあくまでハングル中心であり、漢字はハングルの後のカッコ内に書くものとしている。但し書きに限っていえば、1948年とは違って明確にハングルが主、漢字が従の主従関係になっている。

2. 1961年～1972年

“専用”実現のための施策を果敢に進めたのは朴であった。1961年5月16日に軍事クーデターを執行し、国家再建最高会議議長に就任した朴は、1962年2月5日、文教部⁽¹⁹⁾内に「ハングル専用特別審議会」を設置する。その規定は、第1条、第2条、第3条から成り、第1条と第3条には次のようにある⁽²⁰⁾。

第1条

ハングル専用を推進するに当たり、まず新聞・雑誌に使用される日常用語を審議するために文教部にハングル専用特別審議会を置く。

第3条

審議会は用語を審議・検討し、決定し、用語を広く普及させるために随時会報を発刊して各機関に配布し、一般の質疑に応じる。

特徴は、公文書に限らず民間発行の新聞・雑誌まで対象とした点にある。韓国社会から

の漢字一掃を打ち出したといっている。しかも第3条にあるように単なる廃止ではなく、代わりに固有語⁽²¹⁾を新造し普及させると書いている。漢字側からハングル側へ、ハンドルを大きく切った覚悟のほどが伝わってくる。

しかし、このまま“専用”化に至ったわけではない。この後、1963年12月17日に朴は大統領に就任し、さらに4年経過した1967年11月16日になってようやく、丁一権総理に“専用”化を指示する。『東亜日報』⁽²²⁾に報じられた記事を見てみよう。

“ハングル専用は段階的に”～朴大統領
丁総理に指示～

朴大統領は16日午後、丁国務総理に段階的にハングル専用運動を展開、目標年度には完全に“専用”を実現するよう指示した。朴大統領は完全なハングル専用の目標年度を可能な限り早めるよう併せて指示した。

これを歓迎する多くの声明がハングル学会を筆頭に表明された⁽²³⁾。朴の指示には当時、“専用”を掲げて運動していた全国国語運動大学生協議会の影響もあったと思われる⁽²⁴⁾。同会は、1967年10月7日、大統領あてに建議書を送っている。内容は2点で、その一つは1948年10月9日制定のハングル専用法から「但し書き」を削除すること、もう一つは、大統領の署名は、漢字を用いず必ずハングルで書くこと、というものであった⁽²⁵⁾。

朴の指示から4か月後の1968年3月14日、より踏み込んだ「ハングル専用5カ年計画案」が発表される。さらに同年5月2日には「ハングル専用5カ年計画指針(案)」として国務会議で議決⁽²⁶⁾されている。まずは1968年～1972年の間に漢字を廃止⁽²⁷⁾し、1973年からは完全に“専用”にするというものであった。

そうした中、1968年5月4日に徳寿宮に世宗の銅像が建立された⁽²⁸⁾。そして10月9日の「ハングルの日」に談話文を発表しているが、この中に朴の“専用”に懸ける思いが表れている。

ハングル専用の理想は、いうまでもなく習いやすく書きやすい科学的なハングル専用を以て、民族の自主性・矜持、そして国家権威を確立し、時間と努力を節約して能率的な国民生活を送り、一刻も早く祖国近代化の結実を得ようとするものであり、効果的な大衆教育の促進で文盲[マ]をなくし、国民の知識水準を上げ、文化の伝達と教育の能率向上を図ることにある。

近代化にとって“専用”は欠かせないという信念がうかがえる。そして1968年10月25日、朴はさらに踏み込んだ「ハングル専用推進7項目」を打ち出す⁽²⁹⁾。

- (1) 70年1月1日から行政・立法・司法の全ての文書のみならず、行政サービスの窓口でもハングルを専用とし、国内で漢字の入った書類は受け付けないようにすること。
- (2) (3) (7) 略
- (4) 言論・出版界のハングル専用を奨励すること。
- (5) 1948年に制定されたハングル専用に関する法律を改定し、70年1月1日からは専用とすること(「但し書き」を削除すること)。
- (6) 教科書から漢字をなくすこと。

上記“7項目”の発表は「ハングル専用5カ年計画指針(案)」発表後、半年にも満たない時になされた。完全な“専用”化を、1973年1月1日から1970年1月1日へと3年も早

めた理由は何であろうか。考えられるのは、後述する“三選改憲案”が国会で承認されなかった場合のことを危惧したためではないだろうか。国会を通過しなければ、73年時点で朴は大統領の座にいないことになる。したがって大統領であるうちに完全な“専用”化を実現しておこうとしたのではないだろうか。いずれにしても朴の“専用”化に懸ける並々ならぬ思いが感じられる。

1968年11月5日には「ハングル専用研究委員会設置」（大統領令第3925号）が、24日には“専用”に関する総理訓令（第68号）が発令され、徹底した“専用”が求められた。

1968年12月11日、復元された光化門に横書きハングルで“광화문”（光化門）と自筆した扁額を懸けるパフォーマンスを行う⁽³⁰⁾。

1968年12月28日、文教部は“専用”政策に伴い、1970年から大学入試予備考査をはじめとする学校の入学試験から漢字問題をなくすと発表⁽³¹⁾。

1969年1月15日、政府は“専用”政策に伴い、1970年から戸籍の記載も横書きハングルにすると発表⁽³²⁾。

こうして“専用”化実施年の1970年を迎える。しかし何もかもがハングル一色になったわけではなく、官公庁や学校教育の現場を除けばそれほど大きな変化は起こらなかった。理由は、言論・出版界では相変わらず“混用文”が使われていたことと、1948年の専用法に代わる法律が作られていなかったことなどが挙げられよう。そしてこの1970年以降、“専用”に関する新たな発表や指示はなされなくなっていく。

朴はもちろん、文字政策にのみ関与していたわけではない。大半の業務はほかにあった。朴は、韓国を近代化できるのは自分しかいないと思いこみ、大統領でありつづけようとした。それを阻むのが大統領三選を禁じた現行憲法であったため、朴はあらゆる手法（非常

表1：“専用”関連重要事項（太字は反“専用”）

62. 2. 5	「ハングル専用特別審議会」設置
67.11.16	朴が総理にハングル専用化を指示
68. 3.14	「ハングル専用5カ年計画案」発表
68. 5. 2	「ハングル専用5カ年計画指針（案）」を国務会議で議決
68. 5. 4	徳寿宮に世宗の銅像建立
68.10. 7	「ハングル専用推進7項目」発表
68.10.25	ハングル専用に関する法律の改正を指示
68.11. 5	「ハングル専用研究委員会」設置
68.12.11	光化門に横書きハングル扁額
68.12.28	文教部が70年から大学入試予備考査から漢字問題をなくすと発表
69. 1.15	政府が70年から戸籍も横書きハングルで書き、発行すると発表
69. 7.31	漢字教育推進派の韓国語文教育研究会発足（会長李熙昇）
69. 9.14	大統領三選不可の現憲法改正を目的とした三選改憲案国会通過
69.10.17	三選改憲案国民投票（賛成68%）
70. 3	初・中・高でハングル専用教科書
71. 3. 8	漢字教育の復活を求める共同建議書を20の学会が発表
71. 6. 4	閔寛植文教部長官就任、金鍾泌国務大臣就任
71. 7. 1	朴が第7代大統領に就任
71. 9.21	国家機関の大韓民国学術院が漢字教育の復活を全面支持
72. 8.16	中・高生向け漢字教育用基礎漢字1,800字発表
72.12.27	維新憲法（権限の大統領集中など）公布
05. 1.27	国語基本法公布

戒厳令宣布や国会解散など）を使って憲法改正を目論んだ。1972年12月27日、権限の大

統領集中と大統領選出の間接選挙化を可能にする維新憲法の公布にこぎ着け、絶対権力者の地位を不動のものにしたのであった。なお、大統領になるために“専用”運動を利用したという指摘もある⁽³³⁾。

ところで、「但し書き」であるが、この文言に手が加えられたのは結局のところ 2005 年のことで、ハングル専用法の制定(1948 年)から 57 年後である。2005 年の国語基本法第 14 条「公文書の作成①」⁽³⁴⁾には次のようにある。

公共機関の公文書は語文規範に則りハングルで作成しなければならない。但し、大統領が定める場合はカッコ内に漢字又は他の外国文字を書くことができる。

結局、「但し書き」は削除されることなく、「必要な時」が「大統領が定める場合」に取って代わられたのである。これを大きな変化と見るか小さな変化と見るか、今の段階では判断ができない。もっとも、2005 年の法律改定に関わりなく、韓国はすでにハングル専用の社会になっていたといえなくもない。何よりも小学校教科書には漢字が使われていない点、また中学、高校、大学でも、通っている学校や教科の選択次第では漢字に全く触れなくても卒業できるようになった点大きい。こうした社会を築いたのは紛れもなく朴である。

Ⅳ. 反“専用”運動と朴の宗旨替え

いっぽう“専用”に反対する団体や個人も宣言や声明を出し、新聞・雑誌も“専用”に懐疑的な特集を組み、拙速に過ぎるという理由で政策を批判した。たとえば 1971 年 3 月 8 日、漢字教育の復活を求める共同建議書を 20 の学会が連名で発表している⁽³⁵⁾。

1971 年 6 月には“専用”政策に批判的な閔寛植が文教部長官⁽³⁶⁾に、金鍾泌が国务大臣

に就任しているが、このころになると後述するように朴自身も“専用”政策から心が遠のいていったようである。また国家機関である大韓民国学術院までも、漢字教育の復活を全面的に支持するに至った⁽³⁷⁾。

漢字教育復活を求める声に押され、ついに 1972 年 8 月 16 日、中・高校向け漢字教育用基礎漢字 1,800 字が公布され、再び漢字教育が始まった⁽³⁸⁾。朴が当初考えていた文字政策に逆行する方向が示されたことになる。

では、朴自身の考えはどうだったのだろうか。これに関しては、当時文教部長官だった閔寛植の証言を見てみたい。1999 年 5 月 25 日に開催された第 2 回「世界に躍進する韓国の新 1000 年に備えた文字政策学術大会」で閔寛植が講演している⁽³⁹⁾。概略すると、1971 年、文教部官僚の反対を押し切って閔は大統領へのブリーフィング資料を国漢混用文で書いたという。報告後、閔が大統領に尋ねた。

閔：閣下いかがでしたか？

朴：何が？

閔：私が資料を漢字交じりで作らせた。

朴：おゝ、良かったよ。読みやすいし、分かりやすいし、とても良かった。

この朴の言葉に勇気を得た閔は漢字教育実施に向けて動き出す。常用漢字抽出作業に着手し、公聴会を開いて中高で学ぶ 1,800 字の漢字を選定した。しかし、大統領秘書たちが協力的でなかったこともあって、最終的に常用漢字教育(漢字教育用基礎漢字)に関する施行令が発表されたのは 1972 年のことであった。またこの時、“専用”に関して朴は何も口出ししなかったらしい⁽⁴⁰⁾。閔に対して朴は次のようにもいった。

(“専用”政策は)ハングルを尊重しなさいという意味であって、漢字を捨て

てハングルだけを使いなさいという意味ではなかった⁽⁴¹⁾。

表2：「ハングルの日」の談話文内容

年	題 目	書 式	有無
1961 年	追念辞	国漢文	×
1962 年	祝辞	国漢文	×
1963 年	記念辞	国漢文	×
1964 年	談話文	ハングル	×
1965 年	談話文	ハングル	×
1966 年	談話文	国漢文	×
1967 年	담화문	ハングル	○
1968 年	담화문	ハングル	○
1969 年	담화문	ハングル	○
1970 年	치사	ハングル	○
1971 年	담화문	ハングル	○
1972 年	담화문	ハングル	○
1973 年	치사	ハングル	×
1974 年	치사	ハングル	×
1975 年	담화문	ハングル	×
1976 年	×	×	×
1977 年	×	×	×
1978 年	×	×	×
1979 年	×	×	×

こうした朴の豹変ぶりは、毎年「ハングルの日」（10月9日）に発表される朴の談話文からも読むとすることができる。朴は軍事クーデターを決行した1961年の10月9日に「追念辞」を発表し、世宗の聖徳を称えている。朴が国家再建最高会議議長兼大統領権限代行であった1961年から1979年までの間、『朴正熙將軍談話集』と『朴正熙大統領演説文集』がともに大統領秘書室から刊行されている⁽⁴²⁾。各年のハングルの日の談話文の中で“専用”に触れているのは1967年～1972年までであり、1973年以降は“専用”に対する朴の関心が徐々に薄れていっていることが分かる。

なお1976年以降になると談話文そのもの

が発表されなくなっている。

[表2]にある「담화문」, 「치사」の日本語訳はそれぞれ「談話文」と「致辞（祝辞）」である。「有無」は、文の中で「ハングル専用」に触れているか否かを意味し、触れていれば○, 触れていなければ×とした。触れていて、なおかつ全てハングルで書かれてある年は太字にした。

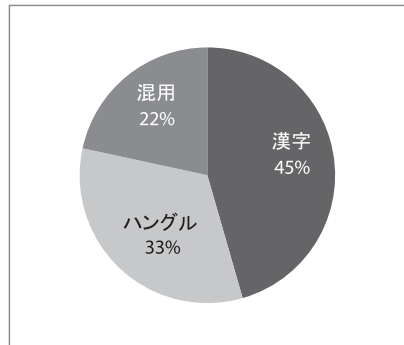
V. 揮毫に見る“専用”の実践

朴は多くの揮毫を残している。韓国のポータルサイトを使って“박정희 (朴正熙)” “휘호 (揮毫)” で検索すれば数多くの朴の揮毫写真を見ることができる。しかし本稿では、1989年に民族中興会から刊行された『偉大な生涯～朴正熙大統領の揮毫を中心に～』に載っている揮毫写真のみをテキストとして扱った。なお同書の巻末付録には「朴正熙大統領の揮毫一覧」があって合計636点の目録があるが、文字情報に限られ、写真もないのでテキストとしては取り扱わなかった。その記述内容にも不正確な部分が少なくなく、漢字揮毫がハングル揮毫になっていたりその逆もあったりして心許ない。結局、同書で筆者が確認できた朴の揮毫は合計134点である⁽⁴³⁾。

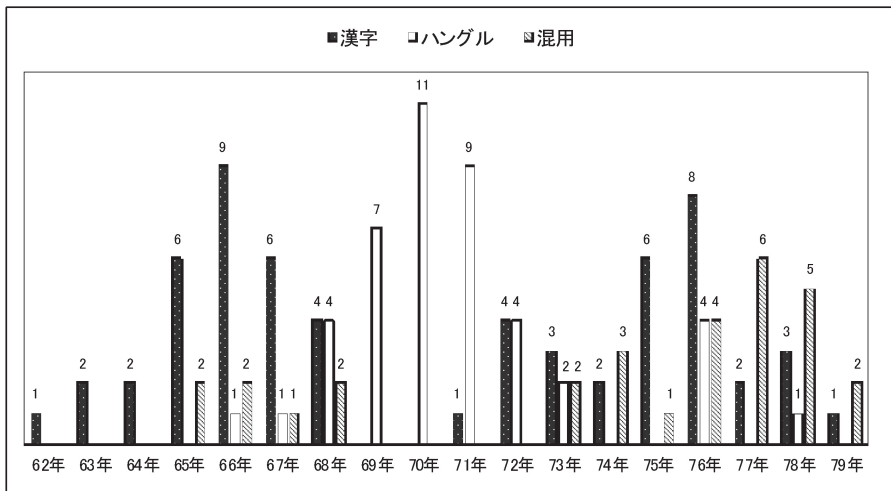
[グラフ1]と[2]にあるように、文字別では、漢字揮毫（「漢」と略す）が45%ともっとも多く、ハングル（「ハ」と略す）は33%、混用（「混」と略す）は22%であった。年代別に見ると、1962年～1964年はいずれも「漢」、1965年に初めて「混」が登場し、「ハ」の初出は1966年の「강물이 깊으면 / 물이 조용하다（深き水は静かに流れる）」である。翌年の1967年は「ハ」が1点、「漢」6点、「混」1点であり、1968年は「ハ」が増え、「漢」「ハ」とも4点ずつ、「混」が2点であった。注目すべきは1969年と1970年である。両年とも「漢」「混」は1点もなく、「ハ」のみが7点、11点と多い。1971年も「ハ」は9点上る。1971年12月17日に「有備無患」

と書かれた「漢」1点が再登場するが、1968年11月から1971年11月までの丸3年間は「漢」も「混」も登場せず「ハ」のみで書かれている。1972年になると、「漢」と「ハ」が4点ずつ、1974年以降は「漢」と「混」ばかりで、「ハ」は1976年と1978年に4点と1点があるだけである。これは先に見た「ハングルの日」の談話文と共通し、朴がハングル専用を強く意識していたのは1968年頃から1972年までといえる。

グラフ1：文字別揮毫作品比率



グラフ2：文字別揮毫数の経年比較



Ⅵ. おわりに

朴は大統領就任前からハングルの実用性、科学性を評価し、創案した世宗を聖王と崇めてきた。その思いが、“専用”政策を強力に押し進める原動力の一因になっていたことは間違いない。特に1967年以降には、知識人や言論界の反対に遭いながらもさまざまな指示を出して“専用”実施を急いだ。ところが1970年代になると、その勢いが急速に衰えていっ

たように見える。さらに1972年以降になると、「ハングルの日」の談話文からも“専用”の文字が消え、ハングルで書き始めた揮毫も漢字へと戻っていった。閔寛植元文教部長官の証言もこのあたりの朴の変節ぶりを傍証している。あれほど望んだ“専用”は徐々に色褪せ、いつの間にか朴自身も宗旨替えをしてしまったのであろう。1948年の“ハングル専用法”から“但し書き”を削除する、このこと

が大きな目標であったはずなのに成し遂げられることはなかった。結局、朴が“専用”を強く望み、自らも実践した期間は、1967年の終盤から1972年までの約5年間だったと結論づけることができる。なお、新たな法律ができたのは朴の没後6年が経過した2005年のことであるが、この時に作られた「国語基本法」にも形を変えた但し書きは残った。

腰砕けの感のある朴の“専用”であったが、今の韓国を眺めれば結果的には“専用”になったといえそうである。新聞、雑誌、小説、そしてインターネットにもeメールにも漢字は見当たらない。大学新入生の80%が自分の親の名を漢字で書けない⁽⁴⁴⁾という。今でも中学以上なら学校で漢字を学ぶことは可能だが、選択科目や学校に選択権がある裁量科目であるために学ぼうとする学生はそう多くないようだ。こうした状況に対しての評価はまちまちだろうが、漢字を書けなくても不自由のない社会が出来上がったことだけは確かである。

実効性のある漢字教育復活を訴える人々は後を絶たないが、身近に漢字のある生活にはもう戻らないのではないだろうか。今の大部分の韓国人の文字を取り巻く環境を、朴が一人で作ったわけではないが、見てきたように朴の影響は間違いなく大きかった。結果論ではあるが、朴は“ハングル専用の父”になったといっていいただろう。

[注]

- (1) 本稿では大韓民国独立前までは“朝鮮”“朝鮮人”“朝鮮語”と書き、独立後は“韓国”“韓国人”“韓国語”と書いた。
- (2) 1968年10月9日(ハングルの日)に建立されたが、2012年東大門区清涼里洞の「世宗大王記念館」へ移された。
- (3) もともと右から左へ漢字で表記されていたものだが、1968年に復元するにあたって

朴自らが左から右へハングルで横書きした。これを報じた「東亜日報」にはテープカットをする大統領夫妻の写りが載っている。しかし2010年8月15日、再復元するにあたって漢字表記へ改められた。なお本稿では、原文が韓国語であるものは全て筆者が日本語に訳した。原文をそのまま載せた場合はカッコ内に日本語訳を入れた。

- (4) (5) 韓国語表記には、大きく分けてハングルだけで書かれたものと、漢字交じりのハングルで書かれたものがある。下のA～Dはすべて同じ意味だが、Aがハングルだけで書かれたハングル専用文(純国文ともいう)、Bは漢語の部分に漢字を書いた国漢混用文、Cは一部の漢語のみ漢字で書いた国漢混用文、Dは純国文だが、一部のハングルに、カッコに入れた漢字を併書している。

A: 모든 국가는 그 나라 국민의 수준에 맞는 지도자를 갖는다.(あらゆる国家はその国の国民の水準に合った指導者を持つ)

B: 모든 國家는 그 나라 國民의 水準에 맞는 指導者를 갖는다.

C: 모든 국가는 그 나라 국민의 수준에 맞는 指導者를 갖는다.

D: 모든 국가는 그 나라 국민의 수준(水準)에 맞는 지도자(指導者)를 갖는다.

筆者はAとDをハングル専用文、BとCを国漢混用文としたが、Dを国漢混用文と見る人もいる。なお、例文は、分かりやすさを第一に考えて挙げたものであって、実際はより難解な単語や、同音異義語などに漢字を使うことが多い。

- (6) 韓国漢字能力検定協会が実施する全国漢字能力検定試験の2級は、15段階中の上から5番目のレベルで、漢字1,817文字の中から出題され、合格点は70点以上となっている。2004年以降の入学生から適用されて

- いる。
- (7) 鄭在景 (1994 : pp.14-15)。朴の経歴は、この書に依拠した。
- (8) 安田敏朗 (1997 : p.107)『植民地の中の「国語学」』からの引用。この書は朝鮮総督府の言語政策について分かりやすく解説されている。また、キム＝ソンジュン (2010 : pp.130-131)によれば、1938 年、小学校の週当たりの時間数で「朝鮮語」は「日本語」の4分の1に過ぎず、しかも「朝鮮語」は随意科目、つまり選択科目扱いとなり、事実上廃止された状態だったという。
- (9) パク＝ワンソ[朴婉緒] (2012 : pp.190-195)は小説の中で「高等学校」と書いているが、1945 年であれば、朴婉緒が通っていた学校の正式名は「私立淑明女子高等普通学校」となる。なお“가”“갸”“거”“겨”とは、日本語でいうならば“い”“ろ”“は”であるから、ハングルを全く知らなかったことになる。もっとも朴婉緒はもともとハングルが読めたので、そのことに対しては自負心を感じたとある。
- (10) 一例を沈在箕 (2005 : p.85)に見てみよう。ここにはハングル＝民族と書かれてある。日本の植民地下でキリスト教信者が増え、ハングルに翻訳された聖書で救国の民主主義や自由を学び、時代の雰囲気からハングル＝民族・民主・自由となり、ハングルは民族のアイデンティティーの象徴となり、同時に救国運動の手段として定着したという。ハングルは信仰の対象となり、“専用”は信仰を守る宗教行事の性格を帯びていると書いている。今の韓国で“専用”を望む人々に、そのまま当てはまるわけではもちろんない。
- (11) 정재경 (1992 : 1997 : p.51)
- (12) 朴正熙 (1969 : p.105)。
- (13) 김성준 [キム＝ソンジュン] (2010 : p.50)「法律勅令 總以國文為本漢文附譯或混用國漢文」。
- (14) 樋口謙一郎 (2006 : p.22)によれば、朝鮮政府顧問の井上角五郎が1886年に『漢城週報』を刊行する時、福沢の勧めで国漢混用文にしたという。
- (15) 原文表記は「在朝鮮美國陸軍司令部軍政廳」であるが、「美國」は「米国」と訳した。なお本稿では、旧漢字体は原則として新漢字体に直してある。
- (16) 朝鮮語原文は、韓国「国家教育課程情報センター (NCIC)」教育課程資料室の“教育課程原文及び解説書”から2012年10月15日にダウンロードした。
- (17) (18) 文化観光部「国語政策資料集」(2002年4月 : p.152)。
- (19) 教育行政を司る機関で、日本の文部省(文部科学省)に該当する。存立期間1948年7月17日～1990年12月26日。その後、教育部(1990年～2001年)、教育人的資源部(2001年～2008年)、教育科学技術部(2008年～)と名称を変える。
- (20) 文化観光部「国語政策資料集」(2002年4月 : p.153)。
- (21) 日本語の和語に相当する。ただし韓国語の場合、固有語は漢字で表記できない。例えば、「道路」は日本語で「道路(どうろ)」、韓国語で「道路(도로)」、固有語になると“道”と“길”だが、この“길”を漢字で表記しないし、できない。
- (22) 『東亜日報』1967年11月17日付1面「한글専用은 단계적으로」。
- (23) 『東亜日報』1967年11月18日付7面「『大統領의 한글전용』 전폭지지」。団体名は以下のとおり。「ハングル学会」「民族文化協会」「韓国音声学会」「ハングル専用推進委員会」「ハングル専用打字(タイプライター)研究会」「セッサク(新芽)会」「儒道会総本部」「大韓出版協会」「大韓仏教曹溪宗総務院」「韓国語文学会」。
- (24) 同会は現在、当時のメンバーが中心となって「全国国語運動大学生同門会」というサイトを運営している(2012年10月16日

確認)。ここに当時のさまざまな情報が公開されている。

- (25) 『朝鮮日報』1967年10月10日付「解散당한「한글운동」」。
- (26) (27) 文化観光部「国語政策資料集」(2002年4月：pp.154-155)。なお1968年現在、国民学校から高校までで1,300字の常用漢字が教えられていた。
- (28) 除幕式には朴大統領夫妻のほか、金鍾泌など200人以上の招待客が参席した(『東亜日報』1968年5月4日付7面「世宗大王像 제막」)。
- (29) 文化観光部「国語政策資料集」(2002年4月：p.155)
- (30) 『東亜日報』1968年12月11日付3面「옛모습 되찾은 광화문」。
- (31) 『東亜日報』1968年12月28日付3面「漢字出題 양기로」。
- (32) 『東亜日報』1969年1月15日付3面「戸籍도 한글」。
- (33) 朴のハングル専用政策に反旗を翻す団体や個人は少なくなかった。最も象徴的なのは「柳正基教授事件」である。国立忠南大学の柳教授が、ハングル専用反対のための大会開催を企図したとして罷免に追い込まれた事件で、大統領を向こうに回して一歩も退かぬ戦いぶりは注目を集め、文教部との間で訴訟沙汰となり、決着がつくまで7カ月を要した。柳教授が復職しないことを条件に1969年7月、柳教授に対する罷免措置を文教部が取り消すことで決着した。その後、柳が雑誌『思想界』（1969年10月号：pp.239-245）に寄稿した論評には、一般に政治家がハングル専用に従っているのは、全人口の70%になる30代が戦後生まれのハングル世代だから、その票欲しさからだろうといい、政権獲得のために民族的な文化を破壊するのは「害国の蠢賊」（虫けら）に等しいと書いている。これは政治家を批判しているわけだが、いうまでもな

く朴大統領の三選を可能にする三選改憲を批判しているわけである。つまり、朴の“専用”政策は純粋なものではなく憲法で禁じた三選を可能にし、永久的執権を企てる我欲が根底にあると見ているのである。

- (34) 文化体育観光部(2009)「国語の発展と保存に関する施策及び施行結果報告書」の付録：p.197。
- (35) 韓国語文教育研究会，国語国文学会，国語学会，震壇学会，白山学会，韓国漢学会，哲学研究会，中国語文学会，中国学会，韓国独語独文学会，韓国仏語仏文学会，大韓地理学会，大韓化学会，韓国生物化学学会，大韓教育美術研究会，韓国出版学会，考古学協会，東岳語文学会，言文研究会，韓国口碑文学会（『東亜日報』1971年3月9日付5面「漢字教育 다시 살리도록」）。
- (36) 在位1971年6月4日～1974年9月17日。
- (37) 『東亜日報』1971年9月21日付5面「「漢字教育」전면賛成」。
- (38) 文化観光部「国語政策資料集」2002年4月：p.158／『東亜日報』1972年8月17日付6面「中高 漢字教育용 기초漢字1,800字」。
- (39) 『自由』1999年6月〈通巻310号〉：pp.23-24。
- (40) 同上：p.24。
- (41) 『自由』1996年12月〈通巻280号〉：p.120。
- (42) 『朴正熙將軍談話文集 自1961年7月至1963年12月』は1965年大統領秘書室発行，『朴正熙大統領演説文集 第1集』～『朴正熙大統領演説文集 第16集』も大統領秘書室発行だが，こちらには奥付がない。いずれも2012年6月に韓国国会図書館にて閲覧。なお，1968年の第5集以降は書名も『박정희대통령연설문집 제5집 (朴正熙大統領演説文集 第5集)』とハングル表記に変わっている。
- (43) 筆者作成の[表3：朴正熙の揮毫一覧表]は巻末に掲載した。
- (44) 聯合ニュース2007年3月12日。

[参考文献]

<日本語>

- ・小野鷺堂・小野小鷺(昭和62;平成12)『新編揮毫事典』東京:秀峰堂
- ・安田敏朗(1997)『植民地のなかの「国語学」』東京:三元社
- ・樋口謙一郎(2006)『韓国近現代史のなかのハンゲル』『アジア世界のことばと文化』東京:成文堂

<韓国語>

- ・朴正熙(1965)『朴正熙將軍談話文集』서울:大統領秘書室
- ・朴正熙(1963-1979)『朴正熙大統領演說文集第1集-第16集』서울:大統領公報秘書官室
- ・朴正熙(1969)『박정희대통령선집 1 ~길을 찾아서~』서울:지문각
- ・柳正基(1969)「한글專用과 三選改憲의妄想 ~執筆者の 反省을 促求한다~」『思想界』10月号
- ・民族中興會(1989)『偉대한生涯』서울
- ・정재경[鄭在景](1992;1997)『위인 박정희』서울:집문당
- ・鄭在景(1994)『朴正熙實記一行蹟抄錄一』서울:集文堂
- ・閔寬植(1996)「漢字教育에 대한告白」『自由』12月号
- ・閔寬植(1999)「한글 專用政策과 朴大統領 ~歷史적으로 誤導된 부분을 바로 잡으며~」『自由』6月号
- ・문화관광부[文化觀光部](2002)「국어 정책자료집」
- ・沈在箕(2005:p.85)「国漢混用論의 歷史・文化的背景」(『漢字教育과 漢字政策에 관한研究』所収)서울:역락
- ・南廣祐(2007)『漢字教育』서울:월인
- ・문화체육관광부[文化體育觀光部](2009)「국어 발전과 보전에 관한 시책 및 시행결과 보고서」(「2009 정기국회 보고자료」)

- ・김성준[キム=ソンジュン](2010)『일제강점기 조선어 교육과 조선어 말살정책 연구』서울:景仁文化社
- ・鄭愚相(2011)『漢字漢文教育論集<上>』서울:전통문화연구회
- ・朴婉緒(2012)『그 많던 싱아는 누가 다 먹었을까』경기도:세계사

[表3]の見方

- 1, 漢：年月日，内容，為書き，落款のどこにもハングルが書かれていないもの。
- 2, 混：どこかに一字でもハングルが書かれているもの。
- 3, ハ：どこにも漢字が書かれていないもの。
- 4, 落款分類：大統領朴正熙＞大，朴正熙＞朴，대통령박정희（大統領朴正熙）＞대（大），박정희（朴正熙）＞박（朴）。
- 5, /：改行
- 6, ○：判読不可のもの。
- 7, <>：筆者が書いたもの。

表3：朴正熙の揮毫一覧表

	年 月 日	向	字	揮 毫	為 書 き	烙印
1	壬寅<1962>元旦	縦	漢	革命完遂		朴
2	癸卯<1963>元旦	縦	漢	政清人和		朴
3	癸卯<1963>之夏	縦	漢	視死如帰	為祝／韓國軍事革命史発刊	朴
4	甲辰<1964>元旦	縦	漢	官清民自安		朴
5	甲辰<1964>晩秋		漢	朝耕夜讀		朴
6	<1965 年>	縦	漢	為公為正	為朝鮮日報創刊四十五周年記念	大
7	乙巳<1965>元旦	縦	漢	勤勉儉素		朴
8	乙巳元旦	縦	漢	自活		朴
9	乙巳<1965>○春	縦	漢	祖國近代化	為高麗大学校創立六十周年記念	朴
10	1965 년 9 월	横	混	定礎		朴
11	乙巳初秋	縦	漢	正論大道	為中央日報創刊記念	朴
12	乙巳菊秋	縦	漢	民主公論	為江原日報創刊二十周年記念	朴
13	乙巳十一月	縦	混	為國正論	祝서울신문社創刊廿周年	朴
14	병오년 새아침	横	ハ	강물이 깊으면／ 물이 조용하다		박
15	一九六六年正月	縦	混	우리 靑龍萬歲		朴
16	丙午元旦	縦	混	科学하는 農村		朴
17	丙午元旦	縦	漢	自立		朴
18	丙午初春	縦	漢	温故知新	為「図書館」一月特輯號	朴
19	丙午新春<縦>	横	漢	立志	為亀尾国民学校<縦>	朴 <縦>
20	一九六六年六月	縦	漢	勝共統一		朴
21	一九六六年九月	縦	漢	愛國如家		朴
22	一九六六年九月	縦	漢	人力克天		大
23	一九六六年九月	縦	漢	心外無法	祝釜山日報創刊廿周年	朴
24	一九六六年仲秋	縦	漢	三育教育	為三育実業初級大學開校六十周年	大
25	一九六六年十二月一日	縦	漢	社會正義具現	祝法律新聞社創刊十六周年	大
26	丁未<1967>新正	縦	漢	必勝靑龍	為李○出將軍	大
27	一九六七年一月	縦	混	跳躍하는 行政	為地方行政協會	大
28	一九六七年三月	縦	漢	飲水思源		大
29	一九六七年盛夏	縦	漢	技術革新		大
30	一九六七年八月	縦	漢	少年易老學難成／一寸光陰不可輕	為大邱師大○○○	大
31	一九六七年九月	縦	漢	春秋正氣	為釜山日報創刊廿一周年	朴
32	一九六七年十二月一日	縦	漢	萬法歸一	為法律新聞（略字）創刊十七周年	大
33	1967 년 12 월<縦>	横	ハ	국악은 겨레의 얼		대 <縦>

34	1968 년 1 월 1 일	橫	ハ	착하고／슬기롭고 ／명랑하게	축 어깨동무 창간한들	대
35	一九六八年一月一日	縦	漢	正論不滅		大
36	一九六八年四月	縦	混	三千萬의 不寢番	為空軍將兵一同	大
37	一九六八年戊申四月	縦	混	나라와 함께／ 겨레와 함께	為新聞年鑑發刊	大
38	一九六八年四月〇〇 ＜縦＞	橫	漢	中山間開發	為主要濟州道路	大
39	一九六八年五月	縦	漢	盛業百世		大
40	1968.7.15	橫	ハ	정초		대
41	一九六八年八月	橫	ハ	인권옹호		대
42	一九六八年十月〇〇	縦	漢	眞理不變／ 忠節常青	為韓國丙寅殉教者〇〇	大
43	1968 년 11 월 22 일	橫	ハ	내일의 햇불을 밝혀	서울신문 창간 23 주년에 즈음하여	대
44	1969 년 1 월 1 일	橫	ハ	중단하는 자는 ／ 승리하지 못한다		대
45	1969 년 1 월 1 일	橫	ハ	출전준비	해병제 1 상륙사단장 박승로 장관을 위하여	대
46	1969 년 1 월 9 일	橫	ハ	생활의 과학화		대
47	1969 년 1 월	橫	ハ	꿈과 용기와 슬기로 자라는／어깨동무가 되자	어깨동무창간 두돌에	대
48	1969 년 9 월 23 일	橫	ハ	자주국방의 전위 팬담공군		대
49	1969.10	橫	ハ	축／154kv 고압변 압기／개발성공	창원공단효성중공업내	대
50	1969 년 11 월 24 일	橫	ハ	사회정화	축 서울신문사창간 24 주년	대
51	1970 년 1 월 1 일	橫	ハ	착실한 전진		대
52	1970 년 1 월 1 일	橫	ハ	자조 · 자립 · 자위		대
53	1970 년 3 월 5 일	橫	ハ	언론창달	조선일보창간 50 주년기념일에	대
54	1970.3.10	橫	ハ	근대화의 샘	샘터지창간에 즈음하여	대
55	1970.3.17	橫	ハ	관광진흥		대
56	1970.4.6	橫	ハ	어린이는 나라의 희망	소년서울창간에 즈음하여	대
57	1970 년 9 월 22 일	橫	ハ	겨레의 목탁	중앙일보 창간 5 주년에 즈음하여	대
58	1970 년 11 월 22 일	橫	ハ	바른글 밝은 사회	서울신문창간 25 주년에즈음하여	대
59	1970 년 12 월 1 일	橫	ハ	더욱밝은／내일을 위하여	민주공화보지령 300 호를기념하 여	대
60	1970 년 12 월 20 일	橫	ハ	독립운동사	발간에 즈음하여	대
61	1970 년 12 월 20 일	橫	ハ	산은 인생의 도장		대
62	1971 년 1 월 1 일	橫	ハ	중단없는 전진		대
63	1971 년 1 월 1 일	橫	ハ	혼란없는 안정 속에 중단없는 전진을		대
64	1971 년 2 월 1 일	橫	ハ	수출은 국력의 총화		대
65	1971 년 3 월 24 일	橫	ハ	신의 · 성실한 보도	매일경제신문창간 5 주년에 즈음하여	대
66	1971 년 4 월 3 일	橫	ハ	일하면서 싸우자		대
67	1971 년 6 월 5 일	橫	ハ	광업진흥	광업공사창설 4 주년에 즈음하여	대
68	1971 년 10 월 15 일	橫	ハ	바른언론／밝은사회	「세대」지령 100 호 발간에 즈음하여	대

朴正熙元大統領とハングル専用

69	1971 년 11 월 22 일	橫	ハ	바른신문 밝은나라	서울신문 창간 26 주년에 즈음하여	대
70	1971 년 11 월 24 일	橫	ハ	충성은 금속을 뚫는다		대
71	一九七一年十二月十七日	縱	漢	有備無患		大
72	一九七二年一月 日 <ママ>	縱	漢	祖國統一世界平和	安義士紀念會館開館記念	大
73	1972 년 3 월 일<ママ>	橫	ハ	책은 만인의 것	세계도시의해에 즈음하여	대
74	1972 년 4 월 17 일	橫	ハ	산업흥국	경인에너지화력발전소 준공에 즈음하여	대
75	一九七二年五月一六日	縱	漢	正其誼不謀其利 / 明其道不計其功	為吳致成議員	大
76	一九七二年六月	縱	ハ	수출상품은 / 국력총 화의 예술품		대
77	一九七二年七月五日	橫	漢	一騎當千		大
78	一九七二年七月十日	縱	漢	蓋馬高原 / 自由義兵		大
79	1972 년 11 월 7 일	橫	ハ	새마을로 / 조국을 푸르르게		대
80	一九七三年癸丑元旦	橫	漢	國力培養		大
81	一九七三年癸丑元旦	橫	漢	維新		大
82	一九七三年一月 日 <ママ>	橫	漢	十月維新 第一次年 度		大
83	1973 년 1 월 16 일	橫	ハ	사랑과 봉사	대한적십자를 위하여	대
84	一九七三年二月十二日	橫	混	全産業의 輸出化		大
85	1973 年 10 月 17 日	橫	混	十月維新과 새마을 運動		大
86	1973 년 9 월 30 일	橫	ハ	구미공업단지		대
87	一九七四年甲寅元旦	縱	漢	勤儉協同 / 總和維新		大
88	一九七四年四月二五日	縱	混	不知老至	朴寬洙先生八旬記念論說集을 위하여	大
89	1974.5.20	橫	混	내一生祖國과 民族을 為하여		大
90	一九七四年七月 日 <ママ>	橫	漢	義勇千秋	學徒兵實戰記出版記念	大
91	一九七四年七月十五日	縱	混	友愛와 奉仕	한국비비에스를 위하여	大
92	一九七五年乙卯元旦	縱	漢	勤儉節約 / 國論 統一		大
93	一九七五年乙卯二月七日	縱	混	和親	高靈朴氏大同譜發刊을 위하여	大
94	1975 年 3 月 5 日	橫	漢	扶義匡正	朝鮮日報創刊 55 周年記念	大
95	一九七五年七月二十一日	縱	漢	德不孤必有隣		大
96	一九七五年九月九日	橫	漢	必勝海軍		大
97	一九七五年十二月十日	橫	漢	勤勉 自助 協同		大
98	一九七五年十二月十二日	橫	漢	必勝編隊		大
99	一九七六年丙辰元旦	縱	漢	増産節約 / 自助自立		大
100	一九七六年丙辰元旦	縱	漢	無欲則剛		大
101	一九七六年丙辰元旦	縱	漢	持己秋霜 / 待人春風		大

102	一九七六年一月三十日	橫	漢	誠實 創意 協同	商工會議所九十年史發刊記念	大
103	一九七六年二月一日	橫	混	繁榮과 統一을 위하여	민주공화보 500 호기념	大
104	一九七六年二月一日	縱	混	平和統一의 大道		大
105	一九七六年二月五日	橫	混	貯蓄은 國力		大
106	一九七六年二月二十日	橫	漢	精誠 精密 正直		大
107	一九七六年三月二十七日	縱	ハ	조국과 겨레와 하늘에		대
108	一九七六年四月二十三日	縱	漢	自然保護		大
109	一九七六年五月一日	橫	ハ	내 생명 조국을 위해		대
110	一九七六年九月十日	橫	漢	春秋正論	釜山日報創刊三十周年記念	大
111	一九七六年十月三日	縱	漢	科學立國／技術自立		大
112	一九七六年十月十五日	縱	混	民族의 大學	서울大學校開校三十周年記念	大
113	1976 년 12 월 1 일	橫	ハ	문화의 샘터／겨레의 길잡이	한국방송공사 종합청사 준공기념	대
114	1976 년 12 월 10 일	橫	ハ	새마을정신의 생활화		대
115	一九七七年丁巳元旦	縱	漢	總和躍進／均衡發展		大
116	一九七七年三月一日	縱	混	새時代의 動力	韓國原子力研究所開所二十周年記念	大
117	一九七七年三月十三日	橫	混	四海躍進	第一海運의 날에 즈음하여	大
118	一九七七年八月四日	縱	混	重化學時代의 旗手	七肥竣工에 즈음하여	大
119	一九七七年十月十七日	橫	漢	貿易立國	大韓貿易振興公社創立十五周年記念	大
120	一九七七年十二月九日	橫	混	새마을運動과 自然保護		大
121	一九七七年十二月日<ママ>	橫	混	自立意志의 勝利	輸出百億弗達成을記念하여	大
122	1977.12.20	橫	混	主穀의 自給達成		大
123	一九七八年戊午元旦	縱	漢	自主總和／國利民福		大
124	一九七八年戊午元旦	縱	漢	天下雖安／忘戰必危		大
125	一九七八年三月十八日<ママ>	縱	混	民族中興의 棟梁		大
126	一九七八年四月一日	橫	混	鐵鋼은 國力	浦項製鐵創立十周年記念	大
127	一九七八年四月	橫	混	文化藝術의 殿堂		大
128	一九七八年菊秋	縱	漢	老當益壯		大
129	一九七八年十月四日	橫	混	國土의 均衡開發	國土開發研究院記念	大
130	一九七八年十月二十日	橫	混	民族의 大役事	農村住宅史創刊에 즈음하여	大
131	1978 년 12 월	橫	ハ	새마을운동은 한국적／민주주의의 도장		대
132	一九七九年己未元旦	縱	漢	總和前進		大
133	一九七九年三月七日	橫	混	通信革新의 搖籃		大
134	一九七九年九月二日	橫	混	民族正氣의 殿堂		大

[Abstract]

Former President Bak Jeonghui and the exclusive use of Hangul

Yoshiro TAKASHIMA

Former South Korea's president Bak Jeonghui (1917–1979) promoted the “Exclusive Use of Hangul –policy” as a writing system policy during his presidency (1963–1979). In 1968, he stated “the Seven Promotions for the Exclusive Use of Hangul”, removed Chinese characters not only from government documents but also from school text books and demanded not to be used Chinese characters in newspapers and magazines. However, quite unexpectedly, the result of this policy came to the full implementation of the exclusive use of Hangul. This “Exclusive Use of Hangul –policy” in South Korea will be reviewed by focusing on Bak himself whilst the way how Bak implemented the exclusive use of Hangul will be revealed.